

批評と紹介

E・フリードマン・P・G・ピコヴィッツ・

M・セルデン著

中国村落における革命・抵抗・改革

加島 潤

本書は、中国の華北平原、河北省は饒陽県に位置する五公村という一村落を対象として社会主義体制下における農村の実態を鋭く描きだした *Chinese Village, Socialist State* の続編である。⁽¹⁾ 前著が主に日中戦争期における五公での互助組の形成から、中華人民共和国成立後の土地改革、農業集団化、大躍進を含む一九六〇年代初頭までを対象としていたのに対し、本書はその続きに当たる一九六〇年代から文化大革命、改革開放、天安門事件をへておよそ二〇〇〇年に至るまでの期間を時系列に沿って叙述している。つまり両者を併せて読むことで五公村という一村落の視点から中国共産党統治下の農村の実態を通観することができるわけである。前著の刊行から一四年、著者らの五公村をめぐ

る研究はここでひとつの到達点を迎えたと言えるよう。

本書の最大の特徴は、前著と同じく五公村という個別事例に徹底的にこだわり、膨大なインタビューと収集資料にもとづいて関連する事象を詳細に描き出した点にある。⁽²⁾ 叙述の中心となるのは五公の指導者・耿長鎖であるが、そのほかにも耿の一族、村の幹部たち、革命に身を捧げる若者や虐げられる元地主たちの不満、憧れ、悲しみ、希望といった感情と日々の暮らし向きに関する様々なエピソードが盛り込まれている。それらは政治闘争の時代をへて改革の時代へと向かっていく中国農村社会のあり方と変遷を鮮やかに映し出しており、その意味で本書は五公村に暮らす人々のライフヒストリーとしての側面を持っている。

とはいえ、本書の視点は五公村内部にのみ固定されているわけではない。五公村は社会主義中国における典型的なモデル村（後述）であり、中央政府、河北省、饒陽県といった上級レベルの指導者との間に密接な関係を持っていた。本書の優れた点は、こうした五公村をめぐる重層的な権力関係に目を配り、意図的に中央―省―区―県―公社―生産大隊（村）―生産隊―個人という各レベルの動向を織り交ぜて記述している点である。さらに水平的な比較対象として五公周辺の村々のエピソード（五公に対する評価を含む）にも触れており、複雑に折り重なる各主体の立場と思考を

描き出すことに成功している。それにより読者は、モデル村をめぐる複雑かつ重層的な関係を立体的に——抽象的な「国家―社会」関係としてではなく——イメージすることのできるのである。

以上のように、本書は数多くのエピソードを複合的に配置するという叙述スタイルを採っており、様々な読み方が可能である。そこで以下では、本書の豊富な内容から評者の関心にもとづきいくつかの論点を提示するという形をとりたい。

I モデル村研究としての意義

まず挙げられるのは本書のモデル村研究としての意義である。前著に関する佐藤宏の書評は、その最大の特徴として政治モデル論からの分析を挙げているが、続編の本書においても同様の視点が継承されている⁽³⁾。社会主義中国におけるモデル村とは、上級権力がある政策や路線を推進する際に模範事例として取り上げる対象であり、最も著名なモデル村は「農業は大寨に学ぶ」運動の山西省昔陽県大寨である。上級権力はモデル村を自らの政治資源として利用し、モデル村はその見返りとして上級から様々な援助（トラクターや資金的な補助など）を与えられる。五公がモデル村となる直接の契機をもたらししたパトロンは、前著で詳述さ

れているように日中戦争中に五公の互助組を「発見」し、農業集団化のモデルに仕立て上げた河北省党書記・林鉄である。彼は北京市市長の彭真のネットワークに所属しており、最終的には中央指導者である劉少奇につながっていた。すでに述べたように、本書の特徴はこうしたモデル村をめぐる重層的な権力関係を明確に視野に入れている点にある。そして一九六〇年代以降を扱った本書においてさらに重要なポイントとなってくるのが、度重なる政治闘争のなかでの上級権力自体の流動性である。五公村を政治モデルとして利用しようとする上級指導者は林鉄に限らず、河北省省長の劉子厚や中共華北局の李雪峰、大寨の農業労働模範の陳永貴もまた、情勢に応じて五公を自身の好ましいイメージに当てはめようとした。しかし政治闘争の時期においては彼ら自身の地位も安定的ではなく、五公のパトロンは絶えず入れ替わり、五公村の側も目まぐるしく変動する状況に臨機応変に対応していかなければならなかった。最も象徴的なのは、文革初期における林鉄の失脚とその復活である。一九六六年に林鉄が政治的に打倒され反林勢力である劉子厚が河北で権力を握ると、五公はそれまでの林鉄との親密な関係を完全に否定し去り、林を劉少奇の手先として激しく批判した⁽⁴⁾。五公の立場からすれば、それ以外にモデル村として生き残る道はなかったのである。そ

の後、林鉄は一九七〇年代初頭の改革の機運のなかで一九七三年末に復活し、再びかつての政治資源であった五公に接近しはじめる (pp. 196, 221)。そして一九七八年以降林鉄が完全に名誉回復すると、耿長鎖は再び林と手を結び、五公は一九八三年までに林鉄を後ろ盾として改革のモデルとなったのである (pp. 249, 261)。このエピソードは上級権力とモデル村それぞれの生存戦略と相互関係を如実に示しており示唆に富む。著者の言うように、激変する政治的環境のなかでこそ地方指導者の危機回避能力が試されるのであった (p. 5)。

II 村とリーダー——五公村と耿長鎖

上述のモデル村としての五公のあり方と関連して、モデル村とリーダーの関係についても興味深い論点が示されている。すでに見たように、モデル村と上級権力の関係においては特定の上級指導者とモデル村とのつながりが重要であるが、五公村の場合は指導者・耿長鎖が強いリーダーシップを持って上級とのネットワークの窓口として機能していた。一九五〇年代に全国的な労働模範となった耿は、公的な行事を通じて村外とのネットワークを広げ (p. 26)、絶えず変動する政治潮流に柔軟に対応していた。また耿長鎖は単に上級に従順であったわけではなく、モデル村として

の地位を活用し常に上級権力から有利な資源を引き出すべく行動していた。例えば、一九六三年に華北で大洪水が発生した際、耿は五公のモデル村としての評価を上げるために公式の災害援助を断り、村内の反発を押し切って国家への穀物販売ノルマを達成した。その結果、耿の狙いは見事に的中して『人民日報』に五公を称賛する記事が掲載され、また洪水の翌年には国家から非公式に多大な物質的援助を受けたのである (pp. 33-41)。

耿長鎖がこうした村外活動を精力的に展開できた背景には、耿の村内基盤が比較的堅固であったことが挙げられる。本書のハイライトのひとつは、文革中に耿の村内での権威が紅衛兵の挑戦を受ける場面である (pp. 93-97, 102-108)。一九六七年初頭、村内の急進的造反派と北京・天津からやってきた紅衛兵は、五公村民の耿長鎖に対する不満を煽り、批判運動を展開する。それまでの政治運動では直接批判を受けることがなかった耿長鎖は、妻・徐樹寛さえも激しい批判にさらされ、まさにギリギリの政治闘争に直面した。しかし耿が批判大会で屈辱的な三角帽をかぶらされたそのとき、村民は土壇場で耿の清廉さと五公をモデル村として率いて来た指導力に対する支持を表明し、結果的に耿はこの難局を乗り切ることができたのである。こうして耿が政治闘争の時期にも五公村の中心的指導者の地位を維持し、

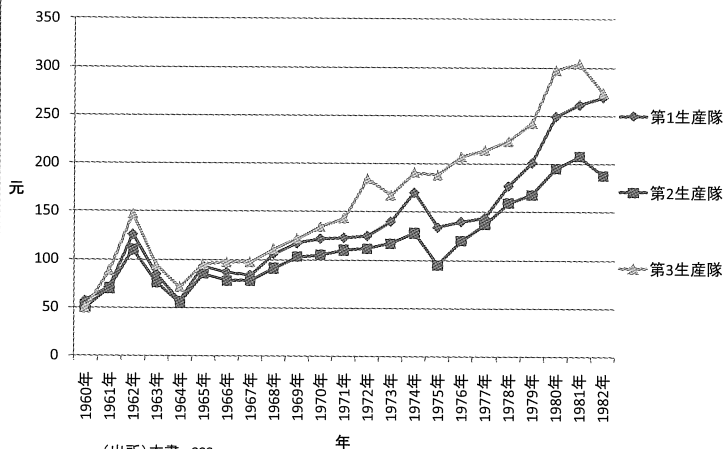
継続的に対外的な窓口として機能し続けたことは、五公のモデル村としての安定的な地位を支えたと言える。

Ⅲ 文化大革命から改革開放へ

——一九七〇年代農村経済の動態

さらに本書で注目されるのは、文化大革命期から改革開放初期にかけての農村の経済的環境の変化が詳細に描かれている点である。本書は文革開始後の展開について、紅衛兵による混乱の時期（一九六六年五月—一九六七年一月）、軍事統制の時期（一九六七年二月—一九六九年）、陳伯達・林彪失脚後の改革派と革命派の対立時期（一九七〇年—一九七六年）、四人組逮捕以後鄧小平の主導権が確立されるまでの時期（一九七六年—一九七八年）、改革開放以後（一九七八年）に分けて通時的に叙述しているが、そこから印象づけられるのは、一九七〇年代初頭の改革を契機とした農村における産業の多様化と隠れた市場経済化への動きである。同改革は、周恩来の主導で集団副業や灌漑、農業機械化などを奨励するものであったが、革命派の抵抗（当時の河北省の指導者・劉子厚は改革に批判的であった）や資金の不足などから必ずしも十分な成果を挙げられず、むしろ農村経済を圧迫する側面もあった。しかし一方で、一部の積極的な村（生産大隊）や生産隊は、食糧生産に偏

図1 1960-1982年五公村（大隊）各生産隊の一人当たり収入額
（集団からの分配分）



（出所）本書p.298。

（注）数値は現物での収入分も含んでいる。

重した従来の政策からの転換に敏感に反応し、改革を自らの生存戦略のなかに組み込んでいた。

とりわけ示唆的なのが、五公村内における各生産隊の改革への反応の差異である。一九七〇年に改革の一環として養豚が奨励された際に、国家への食糧販売ノルマ達成を重んじる耿長鎮に親和的な第一、第二生産隊が慎重であったのに対し、耿と対立的な第三生産隊は積極的に養豚を取り入れ現金収入を得た (pp. 161-162)。その後も第三生産隊は積極的に脱農業的な集団副業 (紙ひも工場など) で現金収入を得る機会を模索し (pp. 175, 178-181)、その結果、

図1に見えるように一九七〇年以降第三生産隊の集団分配による一人当たり収入額は増加した。そしてそれを見た第一、第二生産隊は、紡績工場を設立するなど第三生産隊に追随したのであった。また興味深いことに、こうした村レベルの工場が中古の機械と豊富で安価な労働力により低コストを実現し、村に収入を生み出していたのに対し、饒陽県域に政策的に設立された国营工場はコスト高で無駄が多かったとされる (p. 182)。これらの点から見ると、一九七〇年代初頭の改革は、個々の政策が有効に機能したというよりも、従来の硬直した統制経済に一定の自由な経済活動の余地をもたらすことで農村経済の活力を刺激した側面が強かったと言える。この点は一九六〇年代初頭の改革に

においても同様であり、市場経済化への下からの圧力は計画経済期において常に存在しつづけていたのである。

IV 改革開放とモデル村

また、改革開放前後におけるモデル村の位置づけの変化も重要な論点である。

表1は五公公社内の各村 (生産大隊) の一人当たり収入の推移を示しているが、ここからまず、一九六四—八一年の一人当たり収入 (集団分配分) において五公が一貫して他村を大きく上回っていたことがわかる。これは五公が副業を含む集団的な経済活動を重視してきたことにもよるが、すでに述べたようにモデル村として国家から様々な援助を受けてきたことも大きかった。しかし改革開放以後、とりわけ一九八一年夏に饒陽県が積極的に脱集団化を進め、一九八二年春には県内の九〇%の農家が経営請負制を導入した結果 (p. 250)、一九八一年に多くの村で集団分配分の収入は減少し、また一方で一九八二年の家族収入を含む総収入では各村の収入にあまり差がなくなっていた。これはつまり、市場経済化と脱集団化が進むにつれ、村の発展のパターンが多様化し、政治的ネットワークを持たない周辺の村も五公村と同じ収入水準まで達することができるようになったことを示している。一方、モデル村である五公村

表1 1964-1982年の五公公社内の各村（大隊）の一人当たり収入

単位：元

村(大隊)名	1978年人口	一人当たり収入 (集団分配分)						一人当たり総収入 (家族収入を含む)
		1964年	1968年	1972年	1975年	1978年	1981年	1982年
五公	2,533	61	105	130	156	190	257	279
鄒村	2,839	23	32	65	86	126	100	250
南官莊	836	41	43	46	49	83	37	283
東宋駕莊	761					66	76	285
楊各莊	1,977					96	65	250
王橋	1,208	30	35	57	61	99	60	258
宋橋	1,137					66	57	240
高橋	1,837					112	86	242
園子	641	50	54	35	40	72	41	220
耿口	2,154					84	104	228

(出所) 本書 pp. 251, 299。

(注) 本書 p. 298の表の注より、数値は現物分配分を含むものとみられる。

にとっては、改革開放期に入って計画経済期の硬直的な資源分配システムが崩れたことによって、それまでモデル村として独占的にアクセスしていた特権の価値が相対的に低下したことを意味していた。

とはいえ、改革開放以後においても五公がモデル村として形成してきた村外（とりわけ上級権力）とのネットワークは、そうした資源を持たない他の多くの村と較べればやはり貴重なものであった。その象徴とも言えるのが、耿長鎖が最後の置き土産として残した京九鉄道の誘致である。

耿長鎖は一九八五年一月に死去したが、生前に当時権力の座にあった陳永貴に対して敷設予定の京九線が五公を通るよう懇願しており（p. 200）、その結果、一九九五年に運行を開始した京九鉄道は五公駅に停車することとなった（p. 233）。また政治やビジネスにおいても、村外にコネクションを形成している五公は他村に比べて有利であった（p. 273）。上記のように改革開放初期において周辺の村の収入が上昇し五公との経済的格差は縮小したが、それは全体的な経済成長によるパイ拡大の結果であって、村外とのネットワークを維持する五公村の優位性はそれとは別のレベルで存在し続けたと考えるべきであろう。

以上、評者の関心にもとづきいくつかの論点を挙げてきたが、そのほかにも特に興味深い点として、政治的激変に

伴う五公史の書き換え問題 (pp. 113-115, 187-188)、「革命とナショナリズム (政治闘争のなかで「愛国主義は最後の避難場所であった。」p. 192)」、天安門事件への五公村の対応 (五公郷政府は民主化運動をモラル荒廃の象徴と見ていた。p. 268-269) などが挙げられる。また、本書巻末の五公村の生産隊・生産大隊に関する豊富な統計資料は注目に値する。曹錦清らの研究も同様に浙江省日県Y郷陳家場の統計を多数掲載しているが、こうした基層レベルのまとまった通時的データは一般にアクセスが困難であり、非常に貴重である⁽⁴⁾。今後はこうした複数地域の基層データを吟味・整理し比較検討する試みが重要になってくるであろう。

ともあれ、あらためて本書の豊富な内容を振りかえり、五公というひとつの村にこだわり抜き本書をまとめた著者らの執念に敬服せざるをえない。著者らは改革開放初期から五公を訪れており、その調査の過程自体が五公の歴史を彩るひとコマとして本書に登場する (pp. 233-234)。その意味で、本書はまさに著者らが五公村と歩んだ道のりの記録であり、前著と併せて研究史上の記念碑的な著作であると言える。

註

- (1) Edward Friedman and Paul G. Pickowicz, Mark Selden

with Kay Ann Johnson, *Chinese Village, Socialist State* (New Haven: Yale University Press, 1991)。⁵⁾ 同書の中国語訳は、弗里曼 (Edward Friedman)・畢克偉 (Paul G. Pickowicz)・賽尔登 (Mark Selden) 著、陶鶴山訳『中国鄉村、社会主义国家』(喜瑪拉雅學術文庫・閱讀中国系列、北京: 社会科学文献出版社、二〇〇二年) がある。また本書に関する簡潔な書評として、Ralph A. Thaxton, "Book Review: Revolution, Resistance, and Reform in Village China" (*China Quarterly*, 198, 2009) がすでにある。

(2) 同様に社会主義中国の農村を詳細に描写した代表的な研究に William Hinton, *Fanshen: A Documentary of Revolution in a Chinese Village* (New York: Monthly Review Press, 1966。邦訳は加藤祐三他訳『翻身: ある中国農村の革命の記録』全二巻、平凡社、一九七二年) があるが、行龍・劉素林「二元叙事与土地改革——關於《翻身》、《中国鄉村、社会主義国家》的文本研究」(吳毅主編『鄉村中国評論』第二輯、濟南: 山東人民出版社、二〇〇七年) は同書と *Chinese Village, Socialist State* の叙述スタイルを比較し、前者は中国共産党への政治的共感により視角が限定的である点、後者は相対的に客観的でありつつ暗黙のうちに欧米中心的な近代的価値判断に依拠している点を指摘している。

(3) 佐藤宏「書評・E・フリードマン他著『中国村落と社会主義国家』」(『アジア経済』三五卷一〇号、一九九四年)。

(4) 曹錦清・張樂天・陳中亜『当代浙北郷村の社会文化変遷』(上海・上海遠東出版社、第二版、二〇〇一年)。

Edward Friedman, Paul G. Pickowicz, Mark Selden,
Revolution, Resistance, and Reform in Village China, Yale
Agrarian Studies Series, New Haven: Yale University Press,
2005, pp. 340.

(東京大学社会科学研究所現代中国拠点 特任助教
人間文化研究機構地域研究推進センター 研究員)